岐阜県文化財保護センター調査報告書　第50集

土岐口西山古窯跡

土岐プラズマ・リサーチパーク第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

１９９９

住宅都市整備公団

財団法人　岐阜県文化財保護センター

調査区遠景

遺物出土状況

序

土岐市は、全国的にも有名な美濃焼の産地として古くから栄えてきました。その歴史は実に古代までさかのぼり、今回調査が行われた土岐口西山古窯跡もこうした古い窯跡の１つです。

土岐口西山古窯跡は、土岐プラズマ・リサーチパークの造成予定地内に所在するため、我々岐阜県文化財保護センターが調査を行うことになりました。土岐プラズマ・リサーチパークは、国際的水準の研究学園都市を目指し事業が進められている東濃研究学園都市の中核となる地域であり、21世紀に向けた新しい研究への追及が行われる場となる予定です。そして今回の発掘は1000年の時を越えて我我に古代人の生活の一端を伝えてくれました。これもまた21世紀の研究への遺産となるでしょう。

幸いなことに緑地帯として保存される地区に所在したため、古窯跡は滅失を免れることができました。窯本体の構造や全体の様相を知ることはできませんでしたが、こうした大規模な開発の中で遺跡が保存されたこともまた重要なことです。また今回の調査は、土岐市では類例の少ない白瓷の窯跡の発掘調査であり、今後の研究の一助になると思われます。

最後になりましたが、遺跡の発掘調査や遺物の整理･報告書の刊行にあたり、関係者及び関係機関各位のご理解・ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

平成11年３月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　村　木　光　男

例　　言

1．本書は、土岐市土岐津町土岐口字西山に所在する土岐口西山古窯跡(遺跡番号21212-05314)の発掘調査報告書である。

2．本調査は、土岐プラズマ・リサーチパーク第一土地区画整理事業に伴うものである。住宅都市整備公団より岐阜県教育委員会が委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが調査を実施した。

3．発掘調査は平成10年度に実施し、長谷川幸志が担当した。

4．本書に掲載した遺物の実測は次の者が行った。

後藤幸子・小澤真紀子・長谷川幸志

5．実測図等のトレースは次の者が行った。

後藤幸子・小澤真紀子

6．遺物の写真撮影は長谷川幸志が行い、後藤・小澤が補助した。

7．本書の執筆・編集は長谷川幸志が担当した。

8．地形測量・航空写真撮影は（株）イビソクに委託して行った。

9．発掘調査および報告書の作成について次の方々や諸機関からご助言・ご指導・ご協力を頂いた。記して感謝の意を表する次第である。

荒川孝志・林　順一・加藤真司・長瀬未左子・諏訪洋子・中嶋　茂・土岐市埋蔵文化財センター
土岐市教育委員会文化振興課（順不同・敬称略）

10．発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には次の方々が参加した。

（発掘作業員）　小島鋭夫・岡田良三・小出　鎮・栃井幸枝・鈴木福子・岡田喜美子
小田原洋子・佐藤　学・林　茂樹

（整理作業員）　後藤幸子・小澤真紀子

11．調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターが保管している。

凡　　例

1．本報告書では古代の灰釉を施した陶器について、白瓷と統一表記した。

2．本文中における実測図の縮尺は、層位・遺構が1/40、遺物が1/3を基本としている。

3．調査区のグリッド名は、南西隅のポイントを用いた。

4．本文における実測図の模式と各部位の名称[1)]を第１図に示した。なお反転実測した遺物の灰釉ラインは、実測面の表裏のラインを図示している。

5．個体数については、口縁部計測法[2)]によるものと底部が1/2以上残る個体を１個体とする方法を併用して計測を行った。

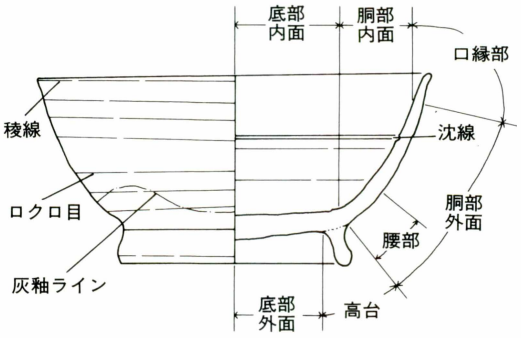
6．土層の色調観察は、小山正忠・竹原秀雄　1995『新版標準土色帖』1995年後期版に基づいて行った。

1）前川　要　1984「猿投窯における灰釉陶器生産最終末期の諸様相―瀬戸市百大寺古窯跡出土遺物を中心にして―」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』IIIに用いられている部位名称を参考に作図した。

2）宇野隆夫　1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 1
第２章　遺跡の位置と環境 …… 3
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　周辺の遺跡 …… 3
第３章　調査の成果 …… 9
　第１節　層位と遺構 …… 9
　第２節　出土遺物 …… 10
第４章　まとめ …… 19
注
参考文献
写真図版



第１図　実測図の模式と各部名称

写真図版目次

図版１　遺構図版（１）
図版２　遺構図版（２）
図版３　遺物図版（１）
図版４　遺物図版（２）
図版５　遺物図版（３）
図版６　遺物図版（４）

挿　図　目　次

第１図　実測図の模式と各部名称
第２図　調査前の地形とグリッドの配置……2
第３図　土岐口西山古窯の表面採集遺物……4
第４図　遺跡の位置と周辺の地形……5
第５図　調査終了後の地形……6
第６図　Ｂ区の層位……7
第７図　Ｂ区の土層堆積状況……9
第８図　Ｐ１……10
第９図　出土遺物（１）……11
第10図　出土遺物（２）……13
第11図　出土遺物（３）……15
第12図　碗類の法量散布図……19
第13図　皿類の法量散布図……20
第14図　碗皿類の高台径……20

表　目　次

第１表　出土遺物集計表……16
第２表　遺物観察表（１）……17
第３表　遺物観察表（２）……18

第１章　調 査 の 概 要

第１節　調査に至る経緯

本古窯跡は、土岐市土岐津町土岐口字西山に所在する。当地域では、平成５年３月に多極分散型国土形成促進法に基づく振興拠点地域構想として承認を受け、極限環境を基本テーマとする研究施設の集積を図る「東濃研究学園都市」の開発事業が始まった。土岐プラズマ・リサーチパークはその拠点として開発される地域である。

この開発事業に伴い埋蔵文化財が損なわれる可能性があるため、住宅都市整備公団から岐阜県教育委員会文化課に照会があった。土岐市は古くから窯業産地として知られた土地であり、今回開発の行われる丘陵周辺にも多くの古窯跡が存在している。その中で損なわれる可能性があるのは『岐阜県遺跡地図』[3)]に穴弘法３号古窯跡として登録されていた本古窯跡ということが確認された。その後（財）土岐市埋蔵文化財センターの手によって現地確認を行った結果、遺跡推定位置付近から白瓷が表採されたため岐阜県教育委員会文化課を通じて当センターが委託を受け、平成10年度に発掘調査を行った。

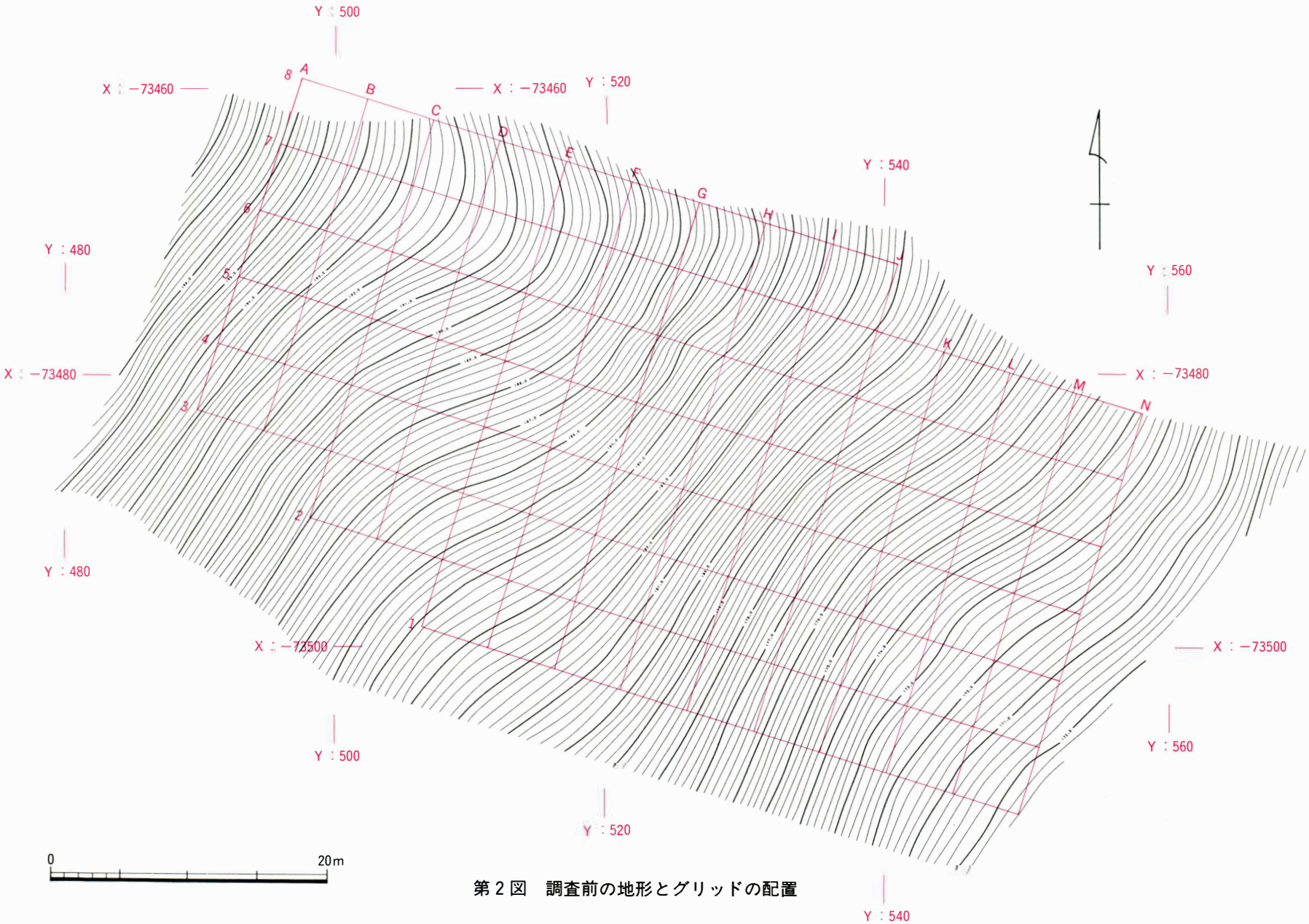
第２節　発掘調査の経過

土岐口西山古窯跡の発掘調査は、平成10年６月15日から８月４日まで行った。古窯跡があると考えられる範囲内に緑地として保存する部分が存在していることが判明したため、緑地帯の南北に調査区を設けて範囲を確認しつつ調査を行うことになった。

グリットは北側調査区（以後Ａ区）の斜面を基準に任意に設定し、メッシュを５ｍとした（第４図）。当初は緑地帯が幅広く残されている関係もあって窯体の位置は全く不明であったが、遺物は下部調査区（以後Ｂ区）を中心に散布していたため、Ｂ区から調査を行った。Ｉ４とＩ５グリッドの表土下約20cmから調査開始直後に灰原が確認された。しかし遺物の広がりがさらに広範にわたることが判明したため、そのまま調査区を広げ斜面の上方から順に掘り下げた。現場はかなりの急斜面であるため足場が悪く、また太い木根をはずすのに手間取り調査が難航したが、約３週間でＢ区の調査を完了した。その結果灰原の範囲は非常に狭く、緑地帯の中に灰原の大半と窯本体が存在している可能性が高まった。そこでＡ区の調査は、窯体の上端と附属施設の有無の確認を主眼として行った。

Ａ区は尾根上の傾斜の変換がみられる緩斜面に設定した。何らかの遺構の検出が期待されたが、白瓷片を２点検出したにとどまり、窯本体が緑地帯の中に存在していることが確実となった。そのためこの時点で調査を終了し、８月４日に調査を終えた。

その後、報告書作成作業及び出土遺物の整理作業を、当センターにおいて３月末日まで行った。



第2図　調査前の地形とグリッドの配置

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地 理 的 環 境

土岐市は岐阜県の東南部、愛知県との境に位置する。古くから瀬戸市・多治見市・瑞浪市などの周辺地域と共に陶磁器の生産地として知られており、古代から近世にかけての多くの古窯跡が残されている。そして現代においても陶磁器の生産・販売は、土岐市の主要な産業となっている。

土岐市は起伏の多い地形であり、中生層と領家花崗岩類、濃飛流紋岩類からなる山地と、それを覆う新第三紀中新世の瑞浪層群、鮮新世の瀬戸層群からなる丘陵地が市域の大半を占める。市街地は、丘陵地を東から西に流れる土岐川とその支流による沖積地や河岸段丘などの平坦面に形成されている。鮮新世の瀬戸層群は上位の土岐砂礫層と下位の土岐口陶土層に分かれる。土岐砂礫層は瑞浪東部周辺にみられる中生層の岩盤が河川によって削られて堆積した層であり、チャート・花崗岩・濃飛流紋岩等の礫により構成される。土岐口陶土層は数層の粘土層を含む地層であり、植物繊維を含む木節粘土・石英粒を含む蛙目粘土・珪砂・亜炭・礫層からなる。この粘土層は古くから陶磁器の原料として用いられ、大量に採掘がなされている。

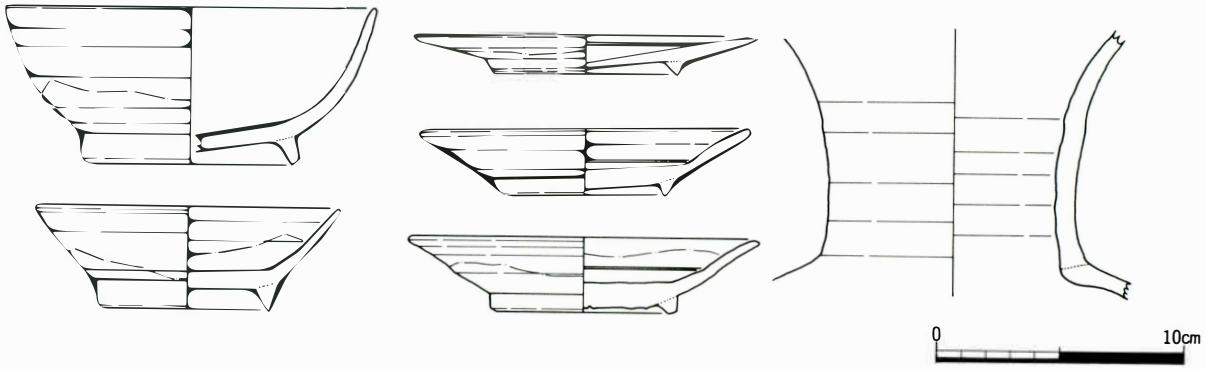
土岐口西山古窯跡は、土岐市と多治見市との境をなす神明峠の南側に広がる丘陵地の北東部に位置する。古窯跡は妻木川の支流である南山川によって開析された洞の南東斜面中腹に立地し、古窯跡下の緩斜面は湧水が形成する湿地帯になっている。古窯付近からは粘土も採取され、水・原材料・燃料などを容易に手に入れることができる窯業を営むのに恵まれた立地条件にあると思われる。今回の発掘によって標高約170～180ｍの範囲から遺物及び灰原を検出した。

第２節　周 辺 の 遺 跡

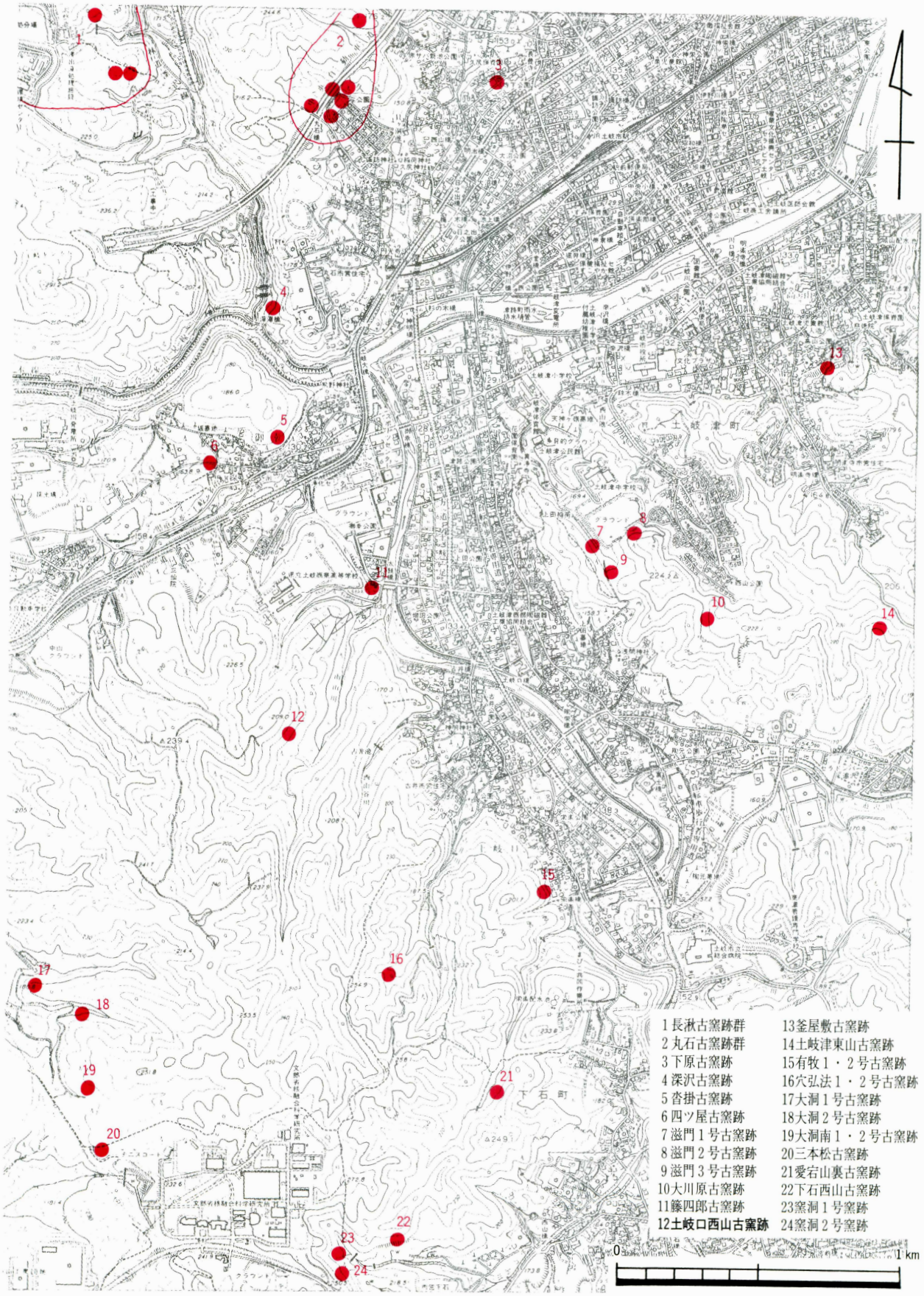
土岐市では古くから窯業が盛んであり、土岐口西山古窯跡周辺でも数多くの古窯跡が知られている。古代では７世紀の須恵器を生産していた隠居須恵器窯・清安寺須恵器窯が知られているが、土岐口西山古窯跡周辺ではこの時期の窯跡は見つかっていない。その他11世紀から14世紀にかけて白瓷や山茶碗を焼成した丸石古窯跡群、長湫古窯跡群が土岐川を挟んで北側の丘陵上に所在している。丸石古窯跡群の中で丸石１・２・４・７号窯跡は白瓷の窯跡であり、１・２号窯については1971年に発掘が行われている。中でも丸石２号窯は、美濃白瓷編年における標式窯の一つとなっている。土岐川より南では、妻木川を挟んで東側の滋門１・２号古窯跡が白瓷の窯跡として知られている。その他同丘陵の南側では大洞北１～３号古窯跡、大洞１・２号古窯跡、大洞南１・２号古窯跡、窯洞１・２号古窯跡などが所在するが、いずれも鎌倉時代の古窯跡である。室町時代以降では穴弘法１・２号古窯跡（古瀬戸系施釉陶器）、有牧１・２号古窯跡（大窯）が同丘陵上に所在するが、生産の主体が土岐川の北に移るため古窯跡数は減少する。

これまでの土岐市の発掘調査は土岐川の北側が中心であり、南側では窯洞１号窯跡（1986年発掘）を除いて調査例がない。また前述の丸石１・２号窯以外で、白瓷を焼成した窯跡の発掘が行われていないため、今回の発掘調査は貴重な事例といえるであろう。

土岐口西山古窯跡は、古くは小屋洞窯址[4]、『美濃の古陶』[5]では穴弘法２号窯として紹介されている。この後『改訂版　岐阜県遺跡地図』[6]を編集するに当たり、踏査によって穴弘法１号窯が２基存在している可能性が高まり、旧来の１号窯を１・２号窯とし、当古窯を穴弘法３号窯とする名称の変更が行われた。しかし『土岐津町誌　上』[7]巻では穴弘法２号窯の名称をそのまま用いているものの、実際には土岐口字小屋洞から南に入った字西山地内に位置している事が指摘されている。また当地域において今後開発が多発する予定であることから、遺跡名を整理する必要が生じた。このような状況を鑑みて、土岐市から県文化課へ名称の変更の申請が出され、現在に至っている。

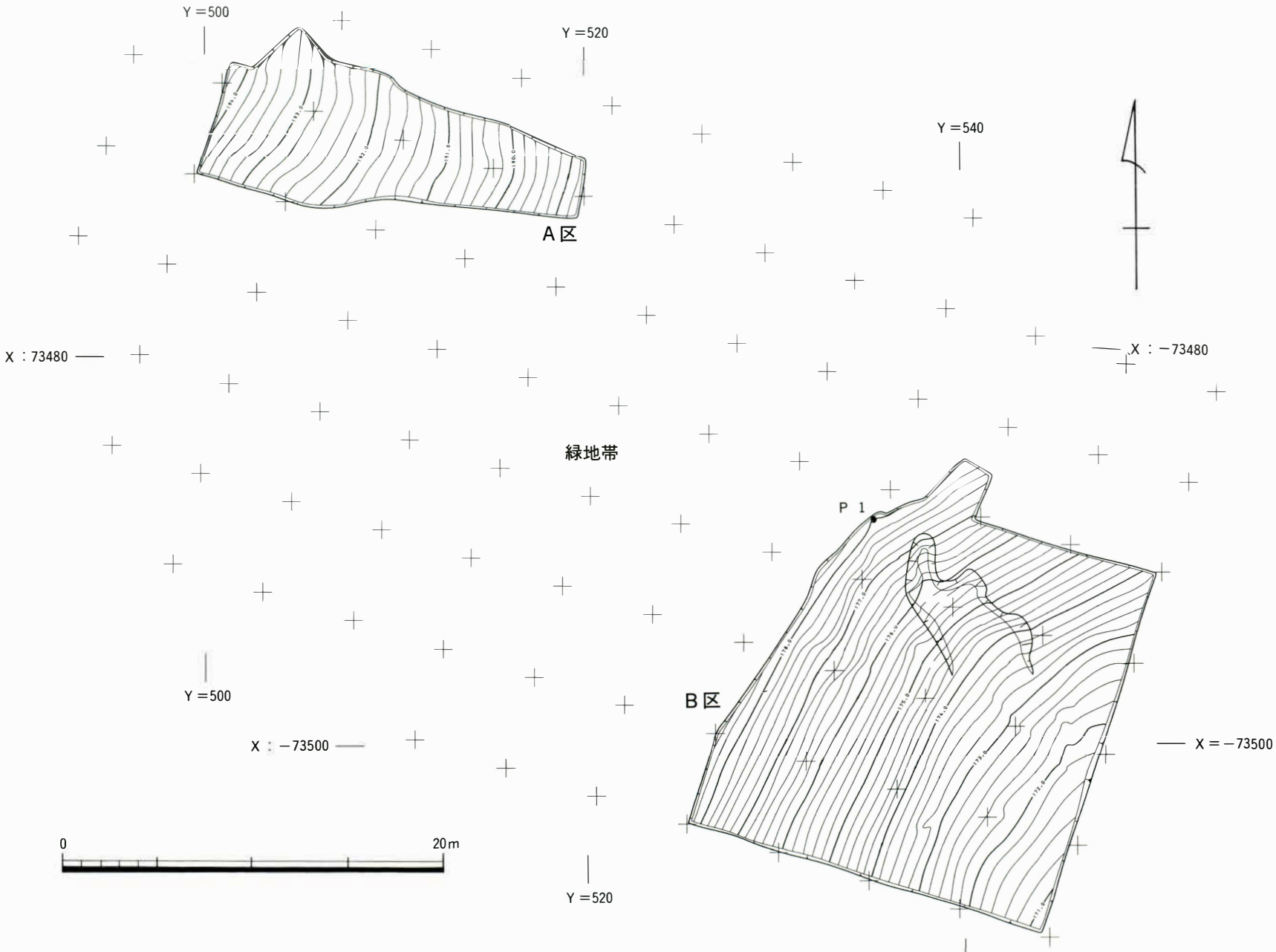


第３図　土岐口西山古窯の表面採集遺物

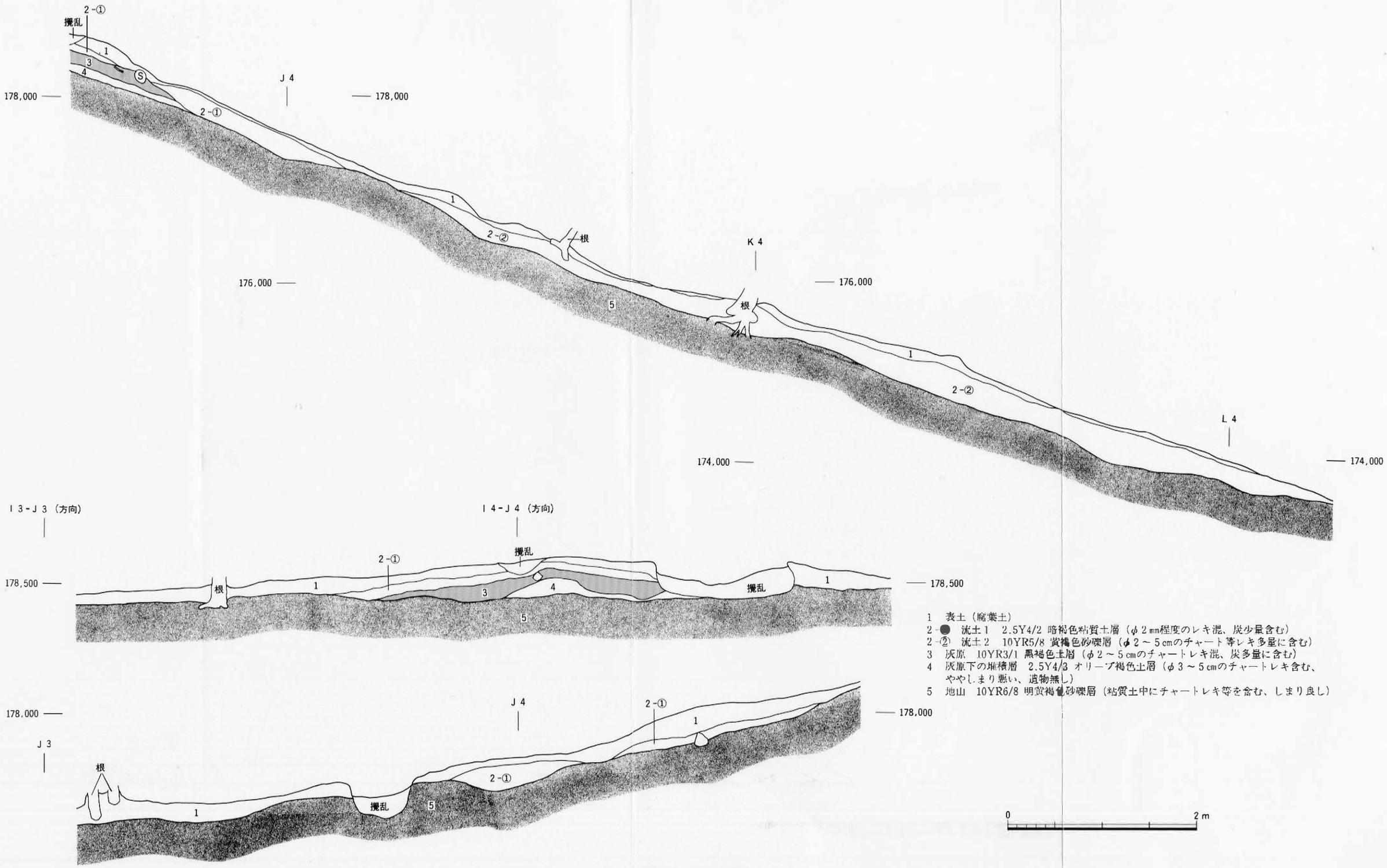


第４図　遺跡の位置と周辺の地形

（土岐市都市計画基本図１/20,000をもとに作成）



第5図　調査終了後の地形



1　表土（腐葉土）
2-●　流土1　2.5Y4/2 暗褐色粘質土層（φ2㎜程度のレキ混、炭少量含む）
2-②　流土2　10YR5/8 黄褐色砂礫層（φ2～5㎝のチャートレキ等レキ多量に含む）
3　灰原　10YR3/1 黒褐色土層（φ2～5㎝のチャートレキ混、炭多量に含む）
4　灰原下の堆積層　2.5Y4/3 オリーブ褐色土層（φ3～5㎝のチャートレキ含む、ややしまり悪い、遺物無し）
5　地山　10YR6/8 明黄褐色砂礫層（粘質土中にチャートレキ等を含む、しまり良し）

第6図　B区の層位

第３章　調 査 の 成 果

第１節　層位と遺構

今回は窯本体の調査を行っていないため、Ｂ区から灰原の一部とピットを１基検出したのみである。以下基本層序とあわせて説明する。

Ａ区の層位と遺構

Ａ区は標高188ｍ～194ｍの付近にある尾根上の緩斜面である。遺物は散布していなかったが、窯本体の上端である煙道部の検出と、周辺と比べ平坦な地形であることから窯に付属する施設の確認を目的として調査を行った。

Ａ区では、表土（１層）の下は礫の混じらない黄褐色の粘質土（２―①層）が覆っている。これは斜面上方からの地山土の流れ込みと考えられる。斜面であるため２―①層の堆積はそれほど厚くなく、斜面下方へ行くと２―①層の堆積はほとんどなくなる。地山はチャートなどの礫を含む土岐砂礫層（５層）である。Ａ区からは遺構は検出できなっかったが、窯本体がＡ区の斜面下にあることが確かめられた。

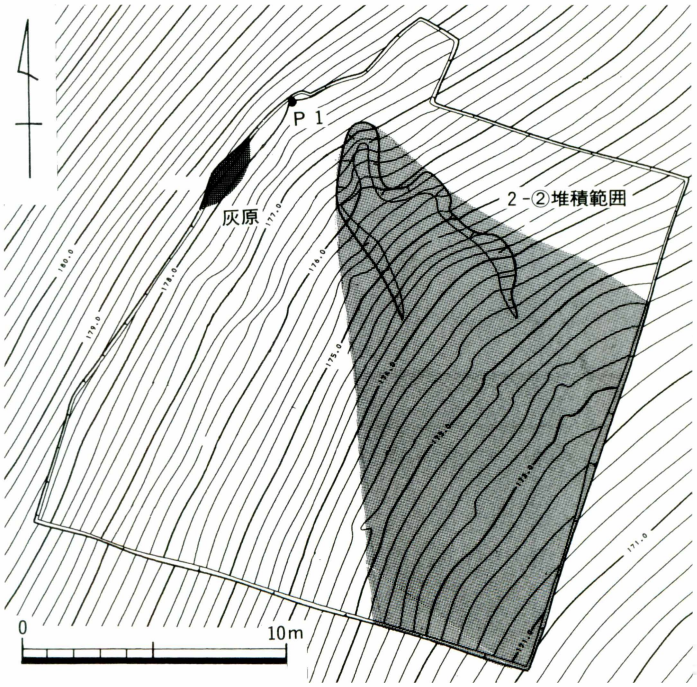
なおＡ区からは、白瓷の破片が２片出土している。

Ｂ区の層位と遺構（第６図、第７図）

Ｂ区は緑地帯として残す部分の南東側の斜面下にあたる。標高171～179ｍであり、遺物はＢ区から緑地帯の中にかけて広く採集されている。窯本体と灰原が検出される可能性があるため調査区を設定した。

当初の予想では、遺物が最も多く採集されたＩ３・Ｉ４グリッドから窯本体か灰原の中心が検出されると思われたが、遺構は検出されず灰原の一部を検出するにとどまった。灰原（３層）は、約1.1×3.1ｍの範囲で堆積しており、最も厚いところで約20㎝を計る。遺物は一定量出土したが、堆積範囲が狭く上地山土が混じり、厚さが薄いことから灰原の縁辺に位置する部分であると思われる。

灰原を２―①層が覆っており、Ｊ３・Ｊ４グリッドから斜面下方にかけて砂礫層（２―②層）が厚く堆積している。２―②層は土岐砂礫層内に含まれるチャートなどの礫が大半を占めており、遺物は２―②層内からも出土している。



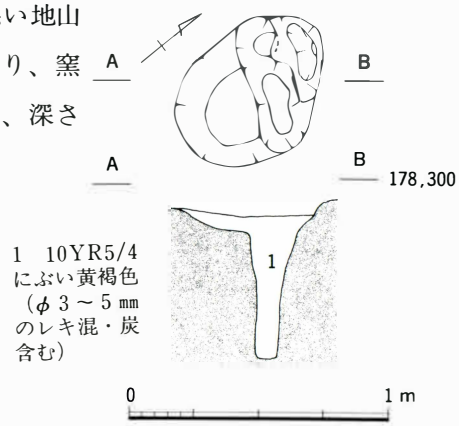
第７図　Ｂ区の土層堆積状況

当層は灰層の東南にある沢状に窪んだ部分から調査区の南に向かって広がっており、末端には碗・皿類の底部や瓶類など大形の破片が多くなるが、出土破片数は減少する。

２―①・②層ともに多くの遺物を包含しているが、灰原と標高がほぼ同じで流出土のみられないＩ１・Ｉ２グリッドなどの地山直上から遺物が若干出土しており、こちらについては何らかの人為的な遺物の移動が行われた可能性がある。またＡ区から出土した遺物についてはさらにその可能性が高いと思われる。

Ｐ１（第８図）Ｂ区のＩ４グリッドから検出した。埋土はしまりの悪い地山と同質の土である。遺物（第９図13など）と炭を最下面まで含んでおり、窯と同時期か直後に掘られたものと考えられる。平面形は楕円形を呈し、深さは約1.1ｍである。

内部の形状が不定型であり、柱穴である可能性は低いと思われる。



第８図　Ｐ１

第２節　出　土　遺　物

今回の発掘では窯本体を調査することができなかったため、遺物のほとんどが灰原または流れ込みによる堆積層からの出土である。そのため層位的な差異による型式差や構成比などの検証を行うことはできなかった。

遺物は白瓷がほとんどであり、口縁部個体数で150.7個体、底部個体数で227個体、破片数で1656片出土している。器種には碗・皿・瓶・壷などがある。その他では還元焼成された土師器甕、胎土が緻密な須恵器質の瓶がある。また窯道具として焼台が出土しているが、ほとんどが細片であり原形をとどめているものはなかった。

１・白瓷

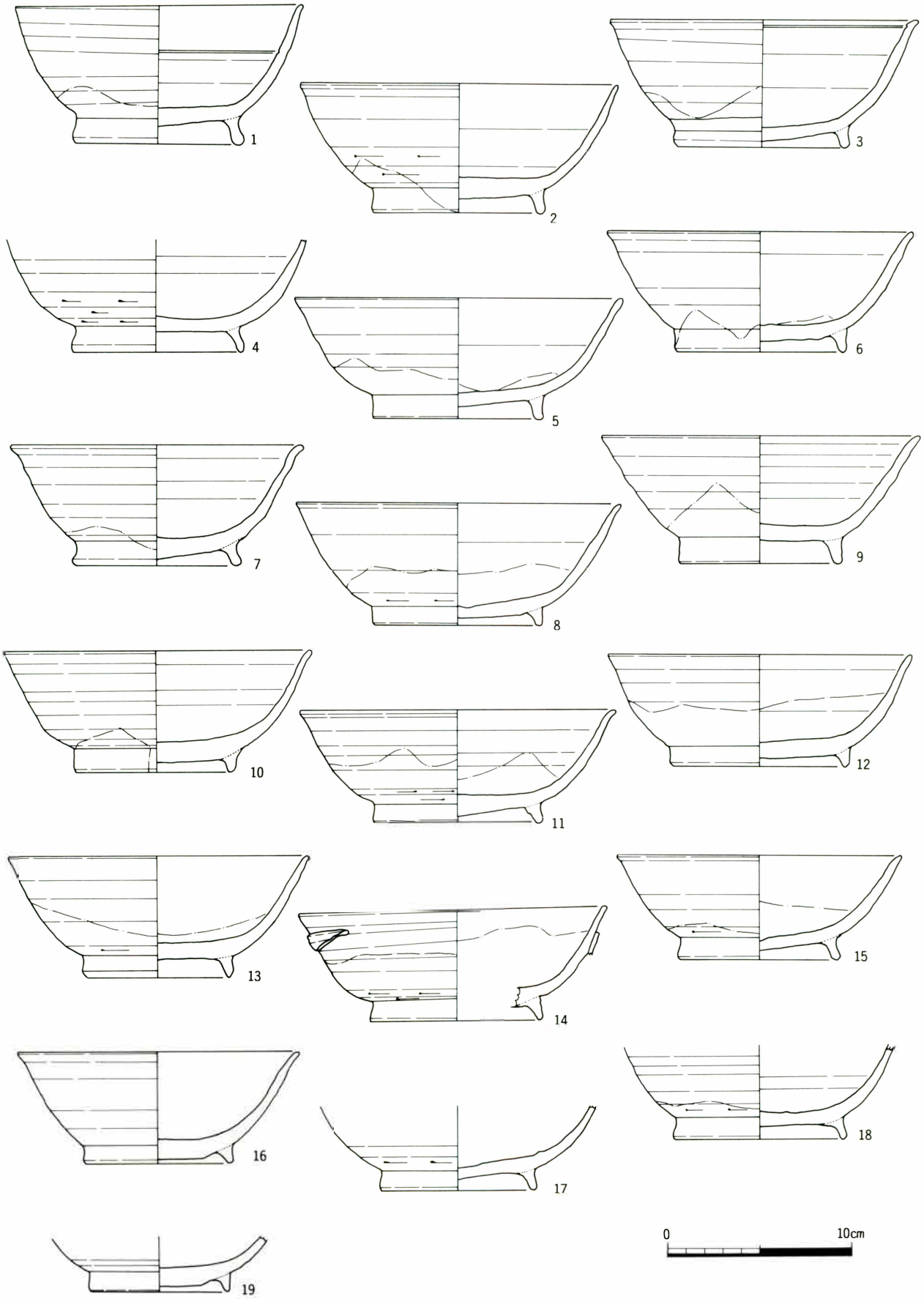
碗類　碗類は、深碗・碗・小碗の３種に分類できる。

深碗　（第９図１～４）　口径に比べて器高が高く、内面に沈線をもつものを代表として分類した。口縁部個体数で6.8個体（内面沈線をもつ碗の口縁部破片を含む）、底部個体数で23個体、破片数で142片出土している。法量は口径15.3～16.3㎝、器高6.9～7.4㎝、底径8.7～8.9㎝を計る。

高台は高く厚手のつくりで端部が丸く収まり、若干外に開くもの（１～３）と内湾するもの（４）がある。高台の接着部と腰部外面との境が明瞭でないのも特徴である。腰部の張りが強く丸みをもち、口縁端部は若干外反する。ロクロ水挽き成形で、底部外面から腰部にかけて回転ヘラケズリを施しており、胴部下半にもケズリ痕を残すものがある（２・４）。

灰釉は腰部付近まで漬け掛けにより施される。

碗（第９図５～19）　碗は本古窯跡において段皿と並ぶ主要生産器種である。深碗に比べて器高が低く、浅碗タイプになっているものを分類した。口縁部個体数で38.4個体、底部個体数で46個体、破片数で698片出土している。法量は口径14.9～17.3㎝、器高5.6～6.7㎝、底径7.3～9.0㎝を計る。高台の



第9図　出土遺物(1)

形状は、外面が垂直に立ち上がり端部を丸く収めるもの（５・８など）、若干外反するもの（７・11など）、内湾するもの（14）、外面に明瞭な稜をもつもの（12・13）等に分類できる。腰部の張りなど器形全体の形状は深碗と大きな違いはないが、高台からほぼ直線的に開くもの（９）や、腰部の張りが弱いもの（16・19）など特徴的な個体もある。ロクロ水挽き成形で、底部外面から腰部にかけてヘラケズリ調整を施しているが、ケズリ調整を残すものと回転ナデ調整でナデ消すものの２種がある。また17は腰部にはケズリを施しているが、底面には糸切り痕が残り未調整である。このことは、底部器壁が薄いことに起因していると思われる。

16・19はケズリ調整を行わないため底部平坦面が狭く、糸切り痕を残している。そのため高台接着部が腰部付近となり、高台径も小さくなったと考えられる。このタイプは碗・皿の各種でみられ、低い高台と厚い底部の器壁が特徴であるが、内外面の調整は比較的丁寧に行われている。

灰釉は漬け掛けで行われ、腰部まで深く漬けるものと胴上半部までしか漬けないものの２種がある。

小碗　（第10図20～23）　小碗は碗の形態を持つもので、法量が碗より小さいものを一括した。口縁部個体数で4.9個体、底部個体数で12個体、破片数で68片出土している。法量は口径が10.7～11.2㎝、器高が3.6～4.4㎝、底径が6.0～6.7㎝のものがあるが、器形全体が観察できるものが２個体しかないため様相は不明である。

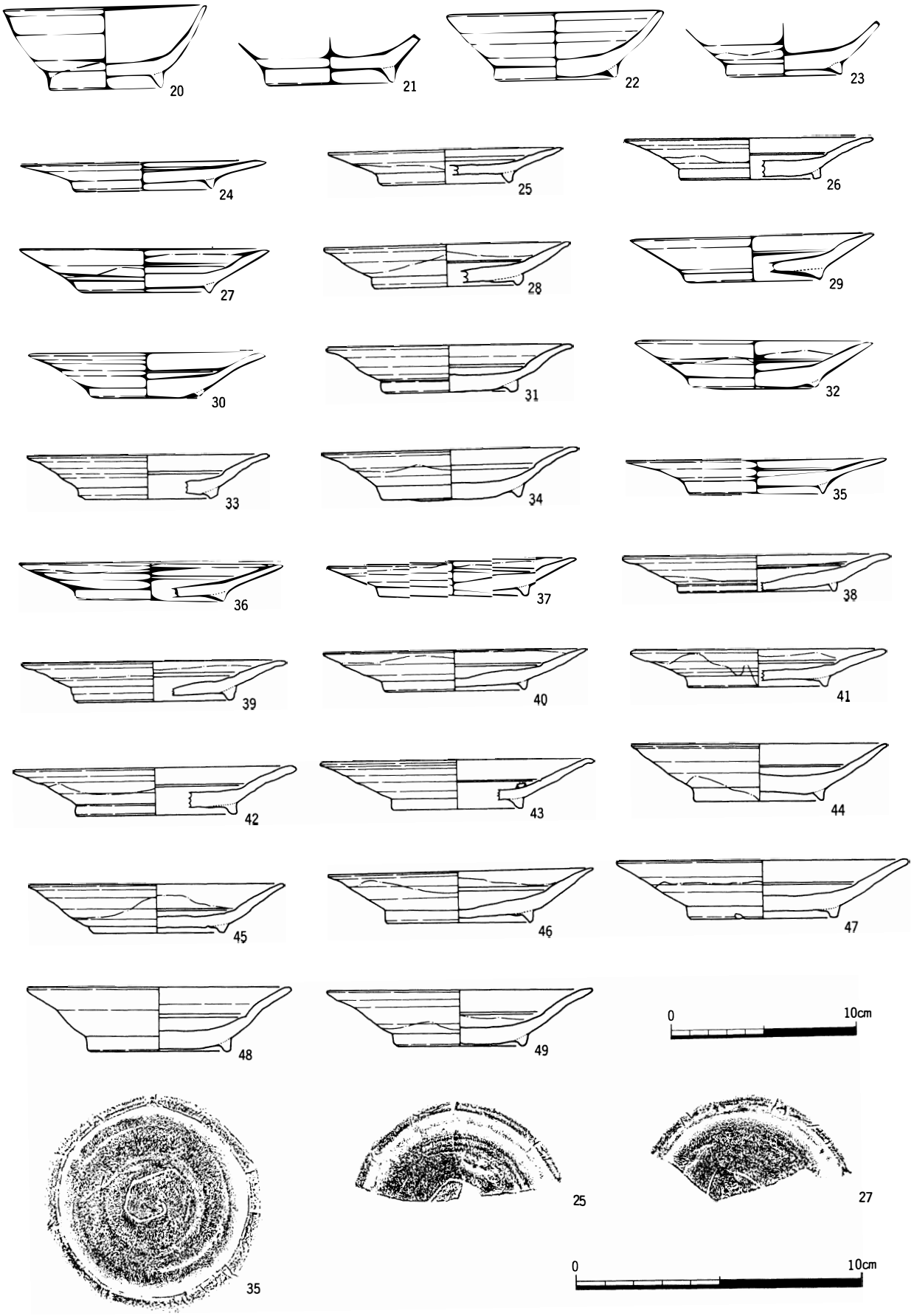
高台が高く胴部の張るもの（20）と高台が外傾し胴部の張りが弱いもの（22）がみられ、その他の破片資料からもこの２種に分けることができそうである（21･23）。前者ついては碗と同様の形態をとり、底部外面のヘラケズリ調整は行っておらず、糸切り痕が一部残存している。後者は前者より調整が雑であり、底部外面に籾殻痕（22）･糸切り痕（23）を明瞭に残し、底部の器壁が厚い。高台は底部外面の外周に付けられ、大きく開いている。

灰釉は内外面に漬け掛けされるようであるが、内面全面に自然釉がかかっている個体が多く、判別できないものが多い。

皿類　皿類は段皿・丸皿の２種に分類できる

段皿　（第10図24～49）　内面にヘラケズリによって明瞭な段を作り出している皿を分類した。口縁部個体数で84.2個体、底部個体数で107個体、破片数で1182片あり、今回の発掘で最も多く出土した器種である。法量は口径12～15.2㎝、器高1.5～3.4㎝、底径6.1～8.4㎝を計る。口径の小さいもの(24～33)と口径の大きいもの（34～49）があるが、量的には口径が13.0～13.6㎝程度の個体が最も量が多い。

形態は、①胴部から口縁部にかけて大きく外反し器高が低いもの（24･35等）、②ほぼ直線的に広がるもの（29・44等）、③腰部に張りをもち口縁部が外反するもの（33・48等）があり、それぞれ法量の大小がある。①は、外面が垂直または内傾、内面が内湾または外傾する細い高台が特徴で、高台接合時の余剰粘土が未調整のまま残されているものが多い。また底部内面中央に凹みのみられるものも存在する(35～39)。ヘラケズリは底部外面に施されるが、糸切り痕が残存するものも多くみられる。②は口縁端部が外反するものとしないものがあり、①と比べて器高が高い。高台は端部外面にナデを施して稜をつけるもの（28・29）、端部を面取りし低い逆台形の形態をもつもの（45・47）、端部を丸く収めた三角形に近い形態をとるもの（43･44）などがある。総じて①より丁寧な作りのものが多いが、断面が逆台形の高台を持つものは調整が粗く糸切り痕や高台接合時の余剰粘土を残している。③は底部の器壁が厚く底部外面が未調整であり、糸切り痕を残すものがほとんどである。底部外面の平坦面


20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
0
10cm
35
25
27
0
10cm

第10図　出土遺物(2)

が突出するものが多く、中には高台が接地していないものもみられる（30･34）。高台は腰部外面に付され、逆台形や断面三角形の形態を取る低いものがほとんどである。腰部付近の器壁が非常に厚く、ヘラケズリによって内面を深く削り込むため、段が①・②に比べて明瞭である。全体的に丁寧な調整が施されている。

25・27・35は、底部に線刻文をもつ。底部外面の中心を囲むように、やや角張った渦状の文様を描く。先の尖った工具を用いている。

ロクロ水挽き成形であり、灰釉は口縁部の内外面に漬け掛けにより施される。

丸皿（第11図50～64）　皿の形態をとるもので、内面に段をもたないものを一括した。口縁部個体数で14.7個体、底部個体数で16個体、破片数で166片出土している。法量は口径11.8～13㎝、器高1.8～3.0㎝、高台径6.4～8.2㎝を計る。

形態は胴部から口縁部にかけて直線的に開くもの（50～58）と胴部に丸みをもつもの（59～63）の２種がある。前者は段皿の①・②・③と同じタイプの高台をもつものが存在し、特徴もそれぞれ類似している。また底部内面に一条の沈線をもつもの（51・54）があるが、沈線の直径が碗の高台径の散布範囲内であることから托になる可能性もある。後者は③のタイプの高台（59）をもつものもあるが、端部を丸く収めるやや太めの高台を付す場合が多い。口縁に比べて高台径が大きいのが特徴である。

64は法量が大きく、小碗として分類することも可能であるが、高台の形態が皿に類似するためここに含めた。調整は雑で底部外面に糸切り痕を残し、高台に籾殻痕がみられる。

ロクロ水挽き成形であり、灰釉は口縁部の内外面に漬け掛けで施される。

瓶類・壷類（第11図65～73）　瓶類・壷類は接合率が悪く、器形全体を観察できる資料がないためこれに含まれる破片をすべて一括している。瓶類は破片から広口瓶が存在していると思われる。口縁端部は、垂直に立ち上がるものと端部下が丸みをもつものの２種がある。胴部は胴上半に最大径があり、その部分に明瞭な稜（70）をもつものともたないもの（71）がある。底部は断面が台形になる高台を付す。

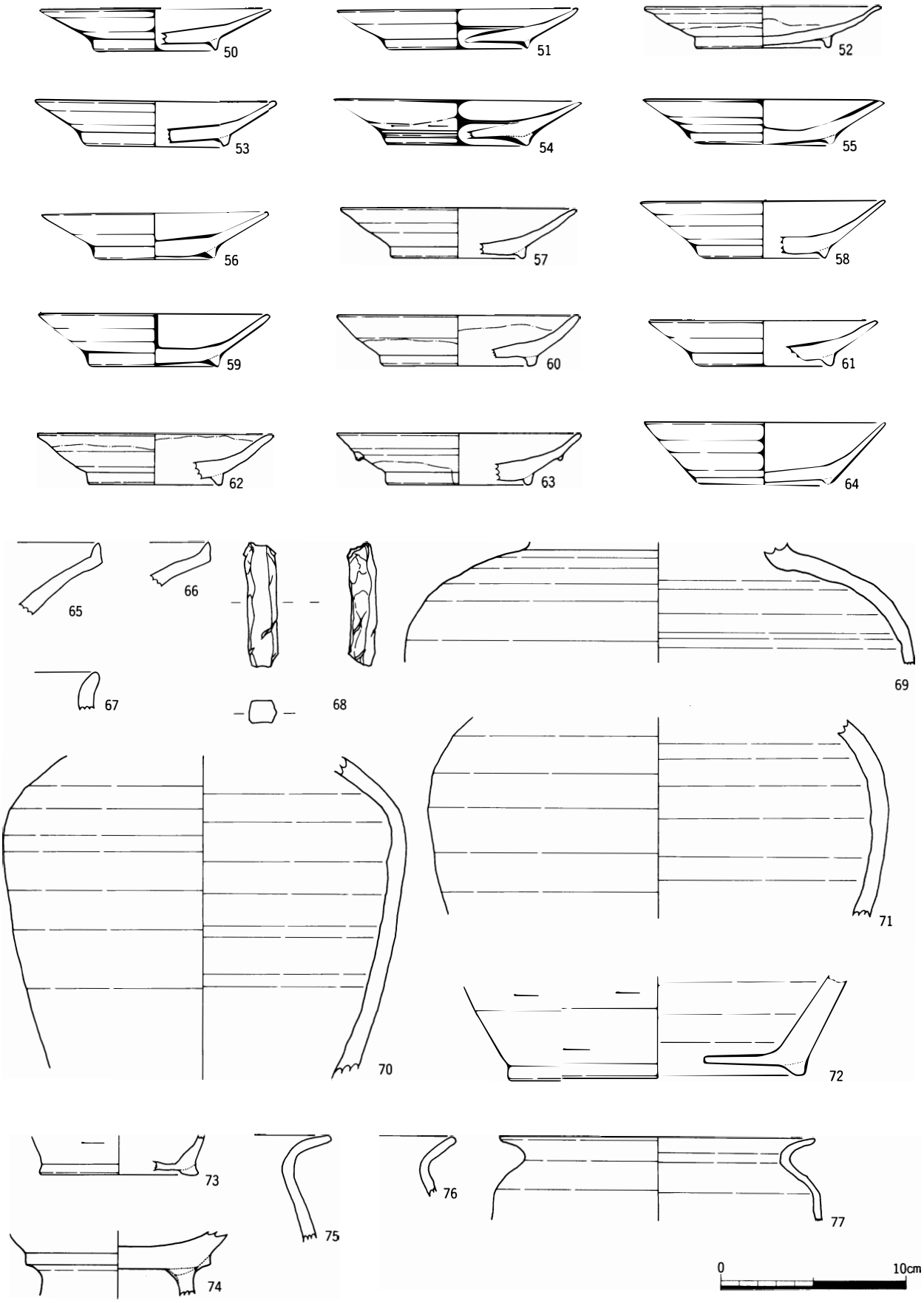
成形は輪積みによって行われ、その後外面を回転ヘラケズリによって調整している。ケズリ痕は回転ナデによってナデ消している。内面はケズリ調整を施すものもあるが、輪積みの隆起を残して回転ナデ調整を行ったのみのものが多い。

68は手付瓶の把手部分と思われる。ねじり合わせた粘土紐の表裏を、糸などの工具で切り取り、面をつけている。口縁部から胴上半に付けられていたと思われる。67は短頸壷の口縁部と思われる。壷と判別できる個体はこの１片のみである。

その他（第11図74）　高坏の坏部と脚部の接合部分と思われる。坏部を成形した後、脚部を粘土を内外面に付加して接着している。坏部下にみられる段は接着時に外面に巡らした粘土を成形して作出している。坏底部は未調整で糸切り痕を残す。

灰釉の有無は不明である。

２．土師器（第11図75～77）　甕の口縁部と思われる。指頭による調整痕が残る土師器であるが、高温で焼成しており色調が青灰色を呈す。「く」の字形に外反した口縁部をもち、胴上半部が張る器形をとる。胎土に石英や雲母などの砂粒を大量に含んでいる。輪積みによって成形しており、内外面を横方向のナデによって調整している。なお底部は出土しなかったため、形状は不明である。


50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
0
10cm

第11図　出土遺物(3)

無釉である。

３．須恵質土器（第11図73）　小型の瓶類の底部と思われる。胎土が緻密で色調が青灰色を呈する。形態は白瓷の瓶類と同様であり、外面にヘラケズリ調整を行っている。

灰釉の有無は不明である。

４．窯道具　窯道具には焼台がある。今回の調査で出土した焼台は細片が多く、図示しなかった。胎土に砂粒を多く含み非常に脆い。一部水平面に高台を置く溝の付けられたものも存在している。

第１表　出土遺物集計表

種別	種別	器種	部位	底部個体数	口縁部個体数	破片数
白瓷	碗類	碗(内面沈線)	口縁部		5.2	87
		深碗	半完形	3	1.4	3
			底部	20		52
		碗	半完形	12	3.6	14
			口縁部		34.8	472
			底部	34		212
		小碗	半完形	2	0.5	2
			口縁部		4.4	42
			胴部			2
			底部	10		22
		不明碗類	胴部			235
		碗類総計		71	49.9	1143
	皿類	段皿	半完形	40	18.9	96
			口縁部		63.8	718
			胴部			81
			底部	67	1.5	287
		丸皿	半完形	11	3.3	20
			口縁部		11.2	113
			胴部			2
			底部	5	0.2	31
		不明皿類	底部	31		308
		皿類合計		154	98.9	1656
	瓶類・壷類	手付瓶	把手			1
		短頸壷？	口縁部			1
		広口瓶等	口縁部		1.9	27
			胴部			159
			底部			13
		瓶類・壷類総計		0	1.9	201
	不明破片		底部	2		2
			その他			2523
	不明破片総計			2		2525
白瓷総計				227	150.7	5525
土師器	甕		口縁部		0.5	6
			胴部			34
土師器総計				0	0.5	40
須恵質土器	瓶類		底部	1		1
須恵質土器総計				1	0	1
遺物総計				228	151.2	5566

第2表　遺物観察表(1)

挿図番号	遺物番号	器種	残存部位	法量			出土位置	出土層位	口縁残存	口縁残存率	底部残存	重ね焼き痕	内面自然釉	焼成	備考	実
				口径	器高	底径										
9	1	深碗	半完形	15.3	7.4	8.7	I 3	2－①	7.7	0.64	1	有	無	良好	内面沈線	完
9	2	深碗	半完形	16.8	6.9	8.9	I 3	1	0.6	0.05	1	有	無	良好	腰部外面にヘラ削り痕	反
9	3	深碗	半完形	16.3	6.9	8.9	I 3	2－①	9	0.75	1	無	有	やや不良	口縁部内面沈線	完
9	4	深碗？	底部	－	－	9	J 4	2－②	－	－	1	有	無	やや不良	腰部外面にヘラ削り痕	完
9	5	碗	半完形	17.3	6.4	8.8	I 3	2－①	3.6	0.30	1	有	無	良好		反
9	6	碗	半完形	16.1	6.4	8.8	J 4	2－②	1.1	0.09	1	有	無	やや不良		反
9	7	碗	半完形	15.6	6.4	9	J 2－K 2	1	2.5	0.21	1	無	有	良好	腰部外面に陵	反
9	8	碗	半完形	17	6.5	8.8	J 3－J 4	2－①	2	0.17	1	無	無	不良	腰部にヘラ削り痕，底部糸切り痕	反
9	9	碗	半完形	16.7	6.7	8.9	I 4－J 4	3	2.6	0.22	1	無	有	やや不良	内外面に明瞭なロクロ痕	反
9	10	碗	半完形	16.4	6.5	8.9	I 3	2－①	6.9	0.58	1	有	無	良好		完
9	11	碗	半完形	16.6	6	8.8	I 3	1	4.9	0.41	1	有	無	やや不良	腰部にヘラ削り痕	反
9	12	碗	半完形	15.9	6	9	I 4	3	3.9	0.33	1	有	無	良好	高台外面に稜	反
9	13	碗	半完形	15.9	6.5	7.6	Pit 1		0.7	0.06	1	有	無	良好	高台外面に陵、腰部にヘラ削り痕有り	反
9	14	碗	半完形	16	6.2	9.1	J 4	2－②	5.3	0.44	1	有	無	やや不良	腰部にヘラ削り痕	完
9	15	碗	半完形	15	5.6	8.4	J 4	2－②	2.3	0.19	1	有	無	やや不良	底部内面中央に渦状のナデ、凹み	反
9	16	碗	半完形	14.9	6	7.8	I 3	2－①	2.5	0.21	1	不明	無	不良	底部糸切り痕	反
9	17	碗	底部	－	－	8.1	J 4	3	－	－	1	有	無	良好	腰部にヘラ削り痕	完
9	18	碗	底部	－	－	9.2	I 4	3	－	－	1	無	有	良好	腰部にヘラ削り痕	完
9	19	碗	底部	－	－	7.3	J 2	1	－	－	1	不明	無	やや不良	底部糸切り痕	反
10	20	小碗	半完形	10.7	4.4	6	J 4	1，2－②	1.2	0.10	1	無	有	やや不良	底部糸切り痕（ナデ消し）	反
10	21	小碗	底部	－	－	6.7	L 4	1	－	－	1	無	有	良好	底部糸切り痕（ナデ消し）	完
10	22	小碗	半完形	11.2	3.6	6.6	I 3	2－①	4.7	0.39	1	無	有	良好	底部外面籾殻痕	反
10	23	小碗	底部	－	－	6	J 3	1	－	－	1	有	無	良好	底部糸切り痕	反
10	24	段皿	半完形	13	1.5	7.5	I 4	1	3.8	0.32	1	有	無	良好		反
10	25	段皿	半完形	12.4	1.8	7.2	J 4	1	3.6	0.30	1	無	有	良好		反
10	26	段皿	半完形	12.8	2.2	7.2	J 3－J 4	1	2.3	0.19	1	有	無	良好		反
10	27	段皿	半完形	13	2.3	7	J 3－J 4	1	3.9	0.33	1	有	無	良好		反
10	28	段皿	半完形	12.8	2.2	7.6	I 3	2－①	3.4	0.28	1	有	無	良好		反
10	29	段皿	半完形	12.7	2.4	7	I 4	2－②	0.7	0.06	0	不明	無	不良	底部糸切り痕	反
10	30	段皿	半完形	12.5	2.4	6.1	I 3	1	1.2	0.1	1	無	有	良好	底部糸切り痕	反
10	31	段皿	半完形	12.6	2.5	6.6	J 2	1	0.3	0.03	1	有	無	やや不良	底部糸切り痕・草茎痕	反
10	32	段皿	半完形	12	2.5	6.3	J 3－K 3	1	6.3	0.53	1	有	無	不良	底部糸切り痕	完
10	33	段皿	半完形	12.8	2.3	7.4	J 3－J 4	1	1.2	0.10	1	不明	無	良好		反
10	34	段皿	半完形	13.4	2.6	7.4	J 3	2－①	0.5	0.04	1	有	無	良好	底部糸切り痕・籾殻痕	反
10	35	段皿	半完形	13.6	1.8	7.4	I 4	1	4.6	0.38	1	無	有	良好		反
10	36	段皿	半完形	13.8	2	7.9	I 4	1	2.5	0.21	0	有	無	やや不良		反
10	37	段皿	半完形	12.9	1.8	7.8	I 3	2－①	7.1	0.59	1	有	無	良好	底部糸切り痕、底部内面凹み	完
10	38	段皿	半完形	13.6	1.9	8.2	J 4	1	2.5	0.21	1	有	無	良好	底部内面凹み	反
10	39	段皿	半完形	13.8	2.1	8	I 3	2－①	3.9	0.33	1	無	有	良好	底部内面凹み	反
10	40	段皿	半完形	13.8	2.1	7.6	I 3	2－①	3.6	0.30	1	有	無	やや不良	底部内面凹み	反

第３表　遺物観察表(2)

挿図番号	遺物番号	器種	残存部位	法量			出土位置	出土層位	口縁残存	口縁残存率	底部残存	重ね焼き痕	内面自然釉	焼成	備考	実
				口径	器高	底径										
10	41	段皿	半完形	13	2	7.2	Ｊ３－Ｊ４	1	4	0.33	1	有	無	良好		反
10	42	段皿	半完形	14.8	2.5	8.4	Ｉ３	1	3.1	0.26	1	有	無	良好		反
10	43	段皿	半完形	14.2	2.6	7	Ｊ４	２－②	2.6	0.22	0	有	無	やや不良		反
10	44	段皿	半完形	13.2	3	6.7	Ｊ３－Ｊ４	２－①	4.5	0.38	1	有	無	良好	底部糸切り痕、内面に不定方向のナデ	反
10	45	段皿	半完形	13.3	2.6	6.8	Ｉ３	２－①	3.9	0.33	1	不明	無	やや不良	底部糸切り痕	反
10	46	段皿	半完形	14	2.7	7.8	Ｉ３	1、２－②、３	5.5	0.46	1	有	無	やや不良	底部内面凹み	完
10	47	段皿	半完形	15.2	3.1	7.9	Ｉ３	1	3.1	0.26	1	有	無	良好		反
10	48	段皿	半完形	13.8	3.4	7.2	Ｊ３－Ｊ４	1	1.2	0.10	1	有	無	やや不良		反
10	49	段皿	半完形	13.7	3	6.6	Ｉ３	1	0.5	0.04	1	有	無	やや不良	底部糸切り痕	反
11	50	丸皿	半完形	12.2	2.2	6.6	Ｊ４	1	0.9	0.08	1	有	無	良好	底部糸切り痕	反
11	51	丸皿	半完形	12.6	2.1	7.4	Ｉ３	1	5.75	0.48	1	不明	無	不良	底部内面凹み・沈線、底部外面糸切り痕	完
11	52	丸皿	半完形	12.4	2.2	7.2	Ｉ４－Ｊ４	3	2	0.17	1	不明	無	良好	底部内面凹み	反
11	53	丸皿	半完形	12.8	2.4	7.5	Ｊ３－Ｊ４	1	1.2	0.10	0	有	無	良好		反
11	54	丸皿	半完形	12.8	2.4	7.4	Ｊ４－Ｋ４	1	1.5	0.13	0	有	無	良好	底部内面凹み・沈線	反
11	55	丸皿	半完形	12.2	2.5	7	Ｉ３，Ｋ４	1	0.9	0.08	1	有	無	良好		反
11	56	丸皿	半完形	12	2.5	6.4	Ｊ３－Ｊ４	1	0.5	0.04	1	不明	無	不良	底部糸切り痕	反
11	57	丸皿	半完形	12.3	2.6	6.8	Ｉ４	２－②	2.5	0.21	1	有	無	良好		反
11	58	丸皿	半完形	12.8	3	6.6	Ｉ４	3	4.6	0.38	1	有	無	不良	底部糸切り痕	反
11	59	丸皿	半完形	12	2.8	6.8	Ｉ４	２－①、３	6.1	0.51	1	無	無	不良	底部糸切り痕	完
11	60	丸皿	半完形	12.8	2.7	8.2	Ｋ２－Ｌ３	２－②	2.75	0.23	1	有	無	良好	底部糸切り痕	反
11	61	丸皿	半完形	11.8	2.4	6.8	Ｋ２－Ｌ３	２－②	0.9	0.08	1	有	無	良好	底部内面中央渦状のナデ	反
11	62	丸皿	半完形	12.4	2.6	7	Ｊ３	1	1.5	0.13	0	有	無	良好		反
11	63	丸皿	半完形	12.8	2.7	7.7	Ｊ４	２－②	0.5	0.04	1	有	無	やや不良	底部糸切り痕	反
11	64	丸皿？	半完形	12.6	3.3	7	Ｉ３	1	2.2	0.18	1	不明	無	やや不良	底部糸切り痕、高台籾殻痕	反
11	65	瓶類	口縁部	－	－	－	Ｊ４	1	1	0.08	0	－	－	良好		断
11	66	瓶類	口縁部	－	－	－	Ｉ３	1	1.3	0.11	0	－	－	良好		断
11	67	短頸壺？	口縁部	－	－	－	Ｉ３	1	－	－	0	－	－	良好		断
11	68	手付瓶	把手	－	－	－	Ｊ４	1	－	－	0	－	－	良好		断
11	69	瓶類	胴部	－	－	－	Ｉ３	1	－	－	0	－	－	良好	輪積み成形、外面削り調整後ナデ消し	反
11	70	瓶類	胴部	－	－	－	Ｊ４	２－②	－	－	0	－	－	不良	輪積み成形、内外面削り調整、無釉	反
11	71	瓶類	胴部	－	－	－	Ｉ３	２－①	－	－	0	－	－	良好	輪積み成形、外面削り調整後ナデ消し	反
11	72	瓶類	底部	－	－	15.4	Ｊ４	２－②	－	－	0	－	－	やや不良	外面削り調整	反
11	73	瓶類	底部	－	－	8.4	Ｊ３	1	－	－	1	－	－	良好	須恵器質、外面削り調整	反
11	74	高坏？	坏底部？	－	－	－	Ｋ４	1	－	－	1	不明	無	不良		反
11	75	土師器甕	口縁部	－	－	－	Ｉ３	1	1.6	0.13	0	－	－	良好	陶質、径1～5mmの砂粒多(石英多)	断
11	76	土師器甕	口縁部	－	－	－	Ｉ４－Ｊ４	２－①	0.7	0.06	0	－	－	良好	陶質、径2～3mmの砂粒多(石英・金雲母)	断
11	77	土師器甕	口縁部	16.4	－	－	Ｉ３	２－①	3.3	0.28	0	－	－	良好	陶質、径1～5mmの砂粒多(石英多)	反

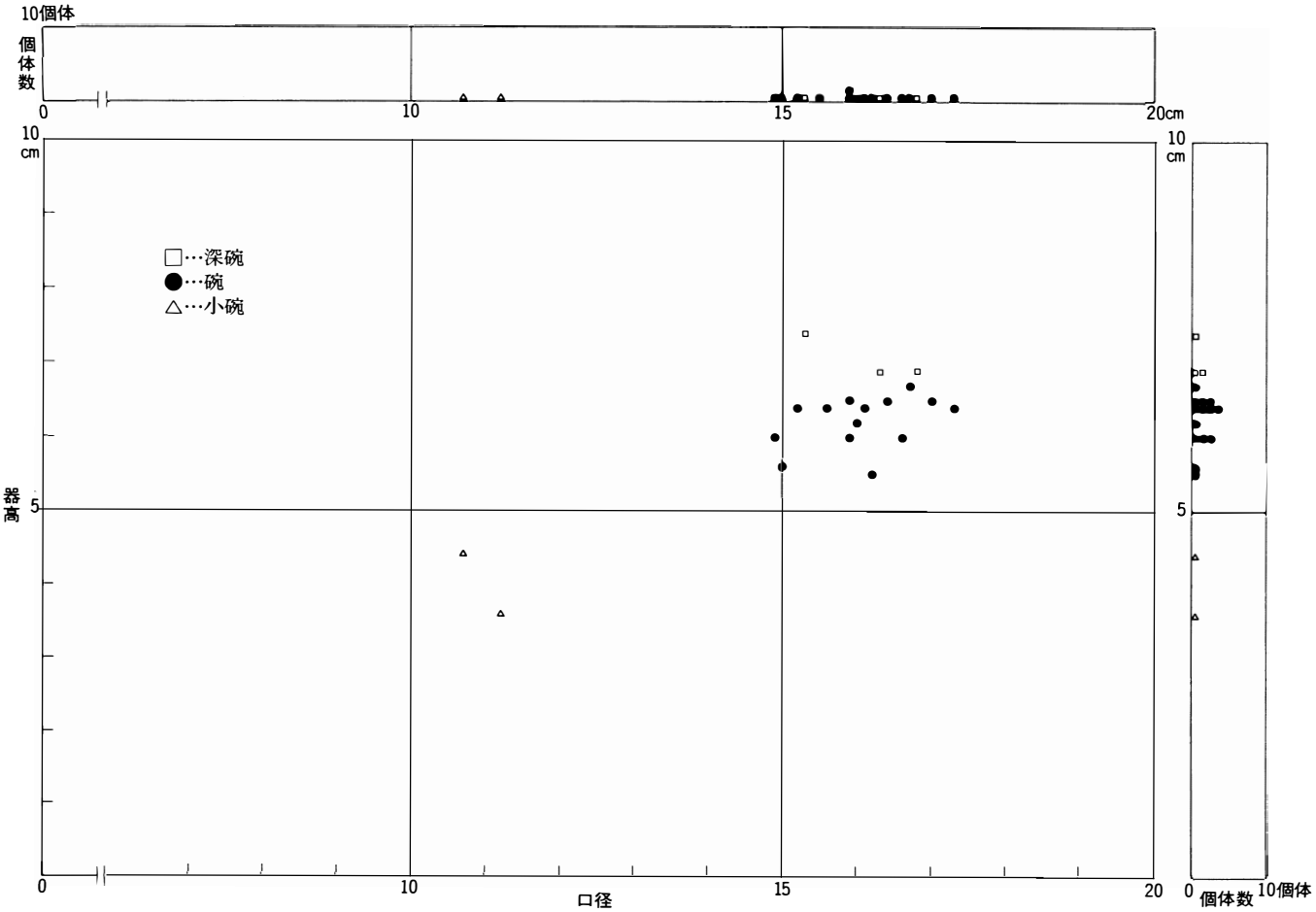
実…実測法の種類を示す。法量の数値はこの実測時の数値による。
完…完形品実測　反…反転実測　断…断面実測

第4章　ま　と　め

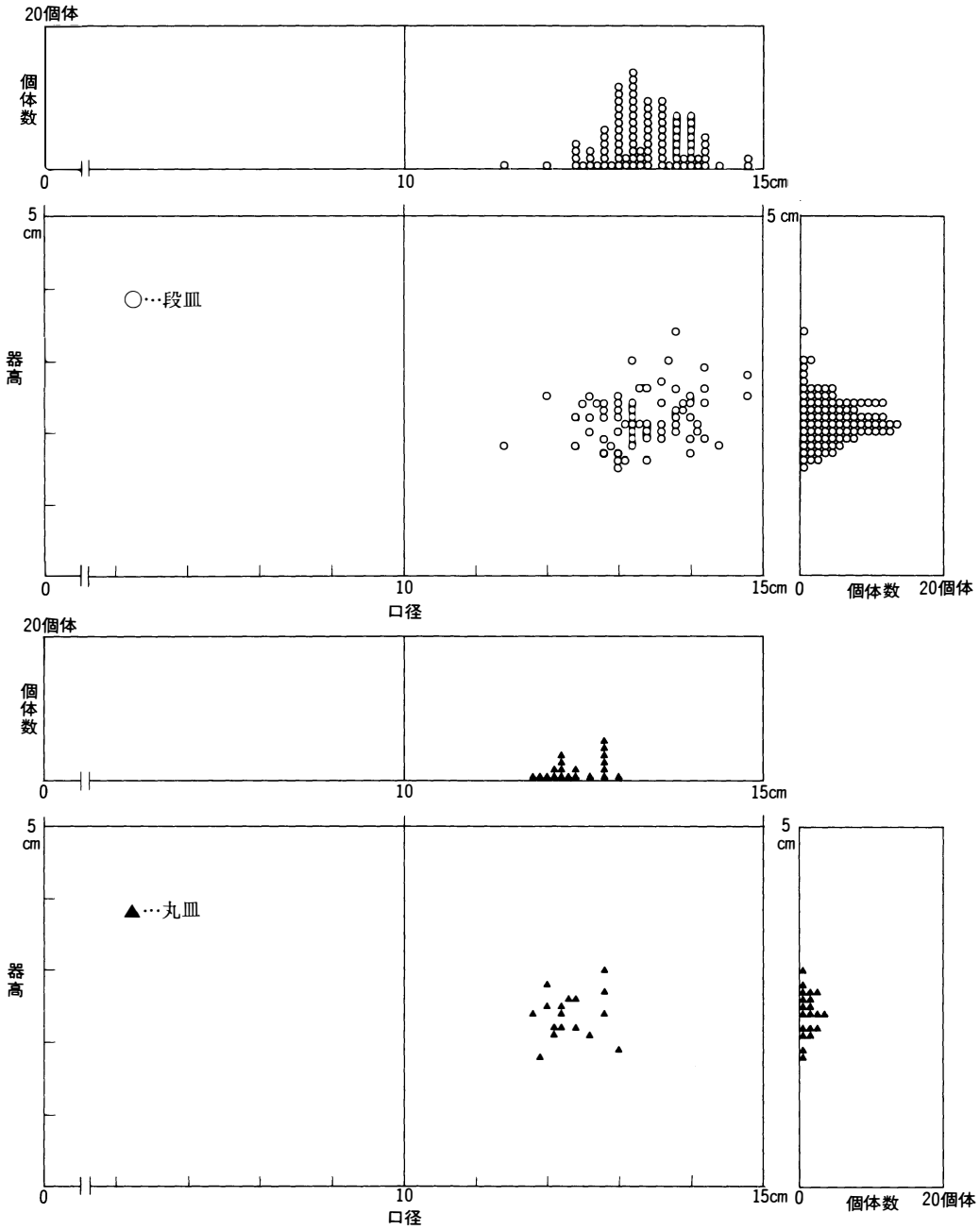
今回出土した遺物の大半は、1・2層といった後世に堆積した層からの出土である。そのため、層位や出土位置からの検討は困難であり今回は行わなかった。ここでは出土遺物の全体の様相を属性ごとに傾向を捉え、土岐口西山古窯跡の様相の一端を伺うにとどめた。

器種構成では、先述のとおり碗類が3類、皿類が2類、瓶類・壺類に分類できる。折縁皿・輪花碗・輪花皿・托・耳皿・鉢などは皆無であり、やや偏りがみられる。しかしこれらの器種が生産されていなかったのか出土しなかったのかは不明である。今回最も多く出土しているのは段皿である。次いで碗が多いが、深碗・小碗の数を足しても段皿の個体数にはおよばず、碗と段皿のセット関係[8]から考えても実際の構成比がこのようになるかには疑問が残る。丸皿は、段皿と比べかなり少ない。虎渓山1号窯式期から丸石2号窯式期にかけて深碗の増加に伴い、段皿が増加することが知られており[9]、時期的な様相を示すものと思われる。

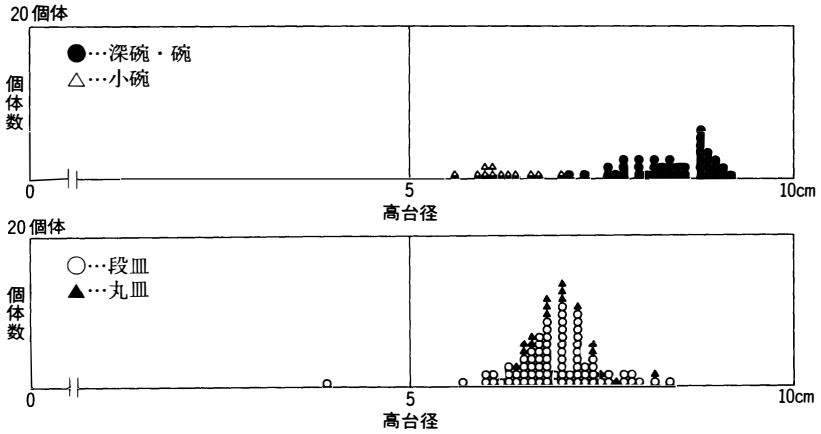
碗の形態は、白土原14号窯のA・B類の分類[10]にしたがえば、図示した個体の内ほとんどがB類に属



第12図　碗類の法量散布図



第13図　皿類の法量散布図



第14図　碗皿類の高台径

し、A類に分類できるものは22・23の小碗のみである。法量の大きいA類については今回検出できなかった。B類は当古窯跡の分類によって3種に分けたが、この内深椀と碗の明確な分離は困難であり、法量上の差異がほとんど無い。白瓷の碗には、白瓷系陶器に直接連続する2種の碗があることは研究者の一致を見ているが、この二つの碗、深碗といわゆる碗Bの概念規定そのものに問題を残している[11]。今回は形態などの若干の差異によって深碗を抽出したが、やはり曖昧な分類になってしまったことは否めない。今後の課題としたい。

皿類については、丸皿の規格性の高さに対し、段皿の法量散布には幅がみられる。先に述べた碗B類とのセット関係による多様化と考えられるが、第III章で述べた段皿の形態については使用目的の違いか時期差かの判断はできない。

成形は瓶類･壷類を除き、ロクロ水挽き成形で行われる。底部に糸切り痕を残すものは全体の約33%（底部個体数）みられ、その多くは高台貼り付け時に高台の内周のみをナデ消している。その他はヘラケズリ調整後、底部外面中央を残してナデ消しているものが多い。他に底部外面に籾殻痕を残すものが3点みられる。いずれも高台が低い器種であり、高台接合時のナデ調整痕の上に付く。このことは成形の後、乾燥が不十分な段階で籾殻の上に載せられた可能性が高い。ただし高台自体にはあまり籾殻痕がみられない。灰釉は口縁部内外面に漬け掛けで施されるが、瓶類・壷類については施釉方法は判断できなかった。

以上土岐口西山古窯跡出土の灰釉陶器について述べてきたが、碗の高台が断面三角形のものが少なく、段皿の法量や碗の高台径が大きいものが多いことから、虎渓山1号窯式[12]に比定される。ただし器種構成比や碗の器種分化などに問題があり、資料不足は否めない。今後発掘が行われた際に再検討する必要があると思われる。

今回、遺構はほとんど検出することができず、古窯跡全体の様相を解明するには至らなかった。しかし灰原の検出やA区の成果から位置を推定することができ、今後発掘調査が行われる際の一助になると考える。また現在周辺から古窯跡が発見されておらず、なぜ単独でこの地に構築されたのかという疑問や妻木川を挟んで東側にある滋門古窯跡[13]との関係など検討すべき課題がある。今後の発掘による資料の増加を待ちたい。

注

3）岐阜県教育委員会　1990『改訂版　岐阜県遺跡地図』

4）土岐津町誌編纂委員会　1997『土岐津町誌　上』の中で、旧『土岐津町』誌においてこの名称が用いられていたことが記載されている。

5）楢崎彰一他　1976『美濃の古陶』　光琳社

6）注３の文献と同じ。

7）注４の文献と同じ。

8）このことは、齋藤孝正　1983　『正家１号窯発掘調査報告書』や注１前川文献によって指摘されている。深碗の高台形が段皿の段内径にほぼ一致することなどから、段皿が深碗の托として機能していたことを示す。

9）山内伸浩　1994「結語」『白土原14号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会

10）注９山内文献。Ａ類は口径に比して器高が低い浅めの碗、Ｂ類は口径に比して器高が高い深めの碗をさす。同文献では虎渓山１号窯式･丸石２号窯式期において碗の法量によってＢ類が３つ、Ａ類が２つに器種分化することが示されている。本古窯では、法量散布の上でＢ類に相当する２種（深碗・碗と小碗）、Ａ類に相当する１種（小碗）を確認した。なお山内氏は、口径16㎝内外のＢ類碗をすべて深碗として扱っている。

11）山下峰司　1995「灰釉陶器・山茶碗」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　真陽社。東濃窯・猿投窯において深碗と碗Ｂの概念規定が一致を見ないことが問題としてあげられている。特に東濃窯では、H72号窯式併行期の深碗と碗Ｂ（注１前川文献等）の形態が近似し、分離する事が極めて困難で見解の一致を見ていないことが指摘されている。本報告書の碗の分類は、近年の多治見市における虎渓山１号窯式期の窯跡の分類を参考にしており、法量を主な基準としている。

12）編年・年代観については、齋藤孝正　1989「灰釉陶器生産の一様相」『美濃の古陶』３、注９山内文献などを参考にしている。なお虎渓山１号窯式は、猿投編年の東山72号窯式期の前半段階、10世紀後半に位置付けられている。

13）滋門１号古窯跡の遺物については、注４文献に記述が見られる。遺物を実見することはできなかったが、実測図から判断するとほぼ同時期のものと思われる。

参考文献

齋藤孝正　1996　「施釉系土器」『日本土器事典』雄山閣

齋藤孝正　1996　「美濃の灰釉陶器」『日本土器事典』雄山閣

瀬戸市教育委員会　1992　『上之山―愛知県瀬戸市吉田・吉田奥遺跡群広久手古窯跡群発掘調査報告書―』

多治見市教育委員会　1990　『明和古窯跡群発掘調査報告書』

多治見市教育委員会　1991　『明和32・33・38号窯発掘調査報告書』

多治見市教育委員会　1996　『大原５号窯発掘調査報告書』

多治見市教育委員会　1997　『明和40・41号窯発掘調査報告書』

図　　版

B 区調査前状況（北東から）

A 区調査前状況（西から）

作業風景

灰原検出状況(1)（南西から）

灰原検出状況(2)（南東から）

図版 2

遺物出土状況(1)

遺物出土状況(2)

完掘状況（右上北）

Ｐ１層位（南東から）

Ｐ１完掘状況（南東から）

Ｂ区完掘状況（北東から）

Ａ区完掘状況（東から）

1

3

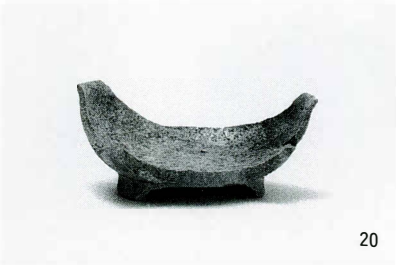
9

10

13

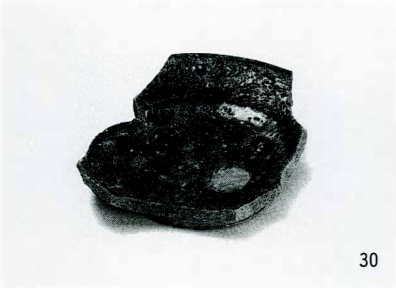
14

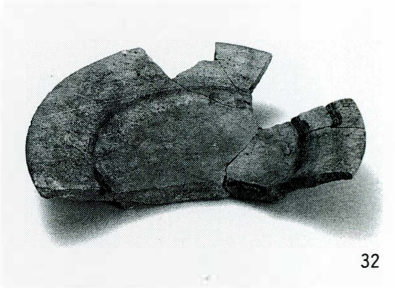
16


20

22

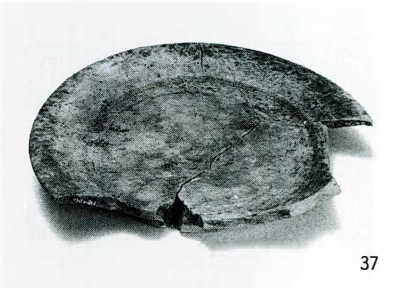
24


30

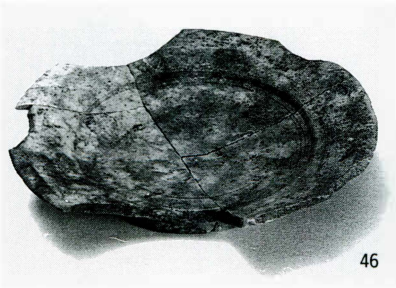

32

34

35

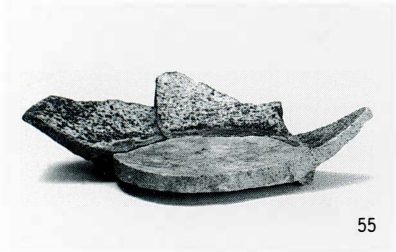

37

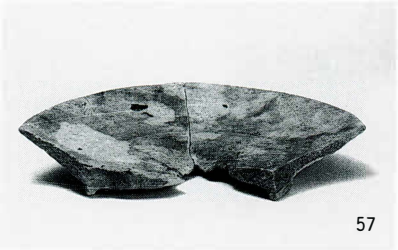
44

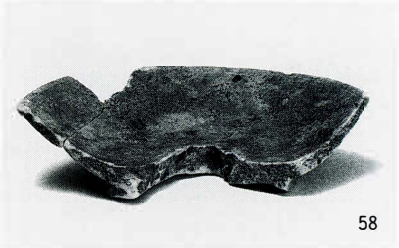

46

48

図版 4


55

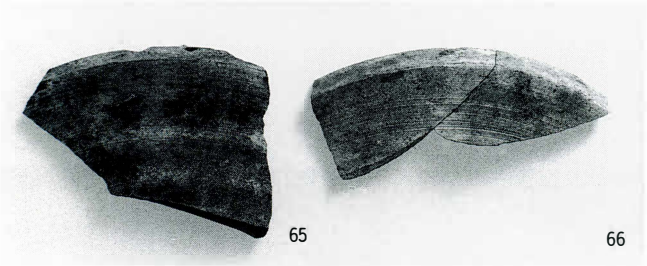

57


58

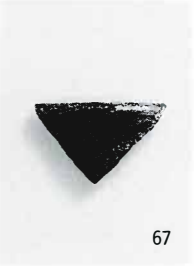
59

61

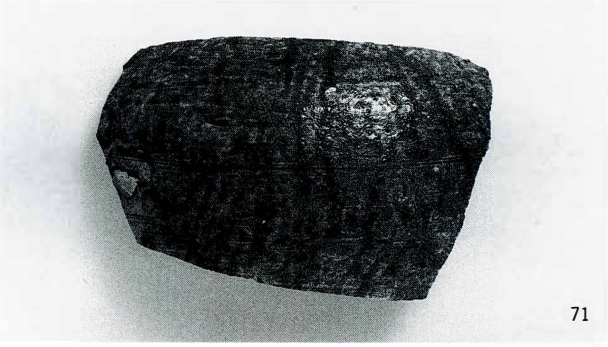
64

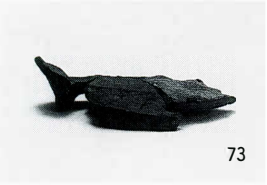

65 66

68 68


67

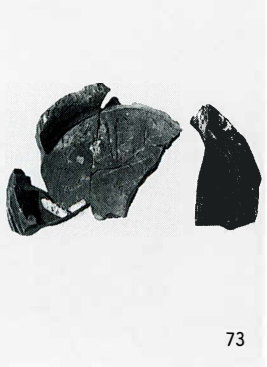
70

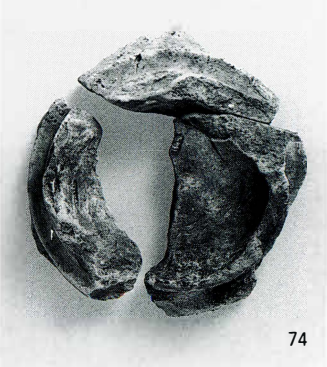

71

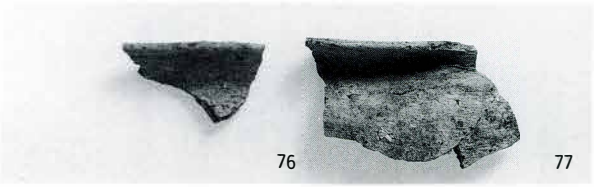

73

74

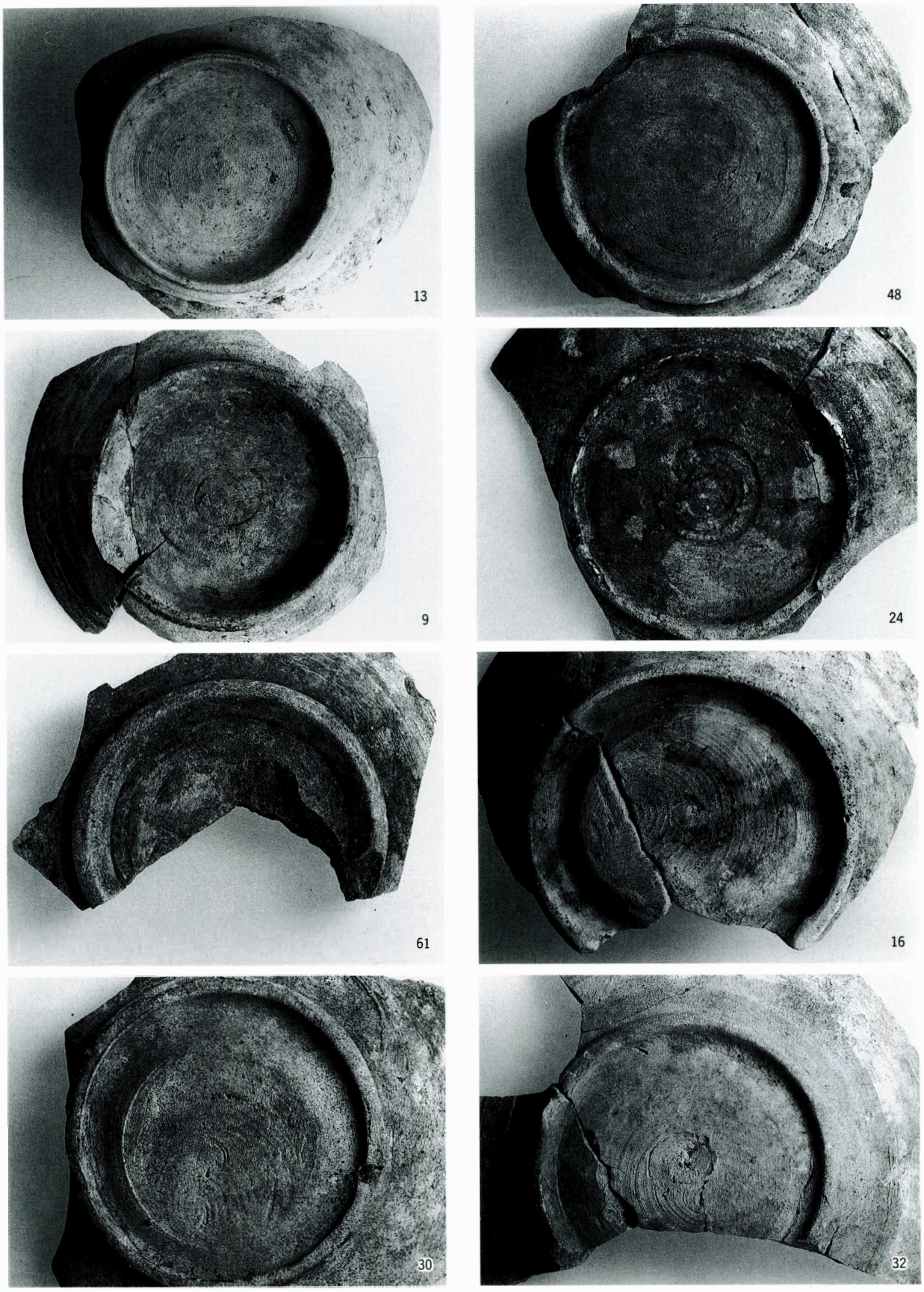
72


73


74


76 77

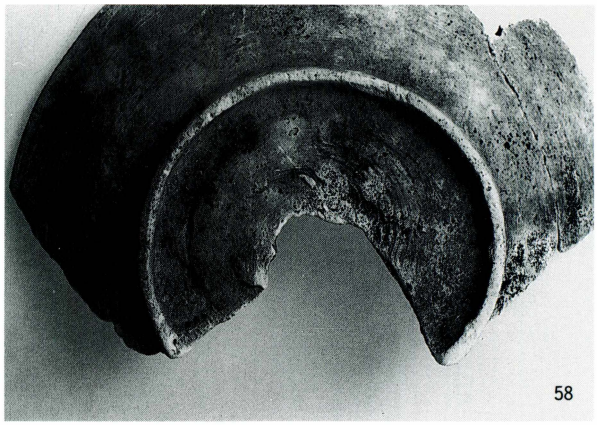
図版５　高台と底部外面調整(1)

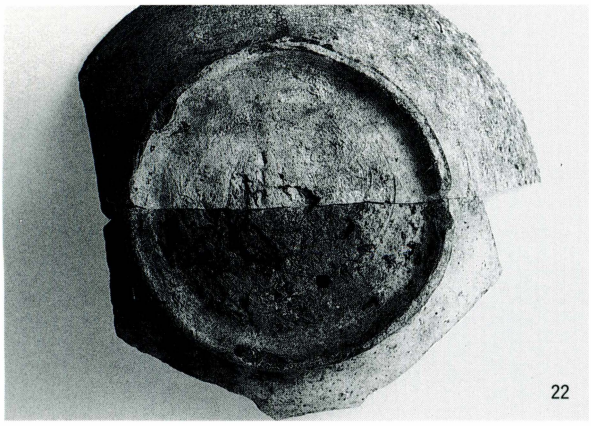


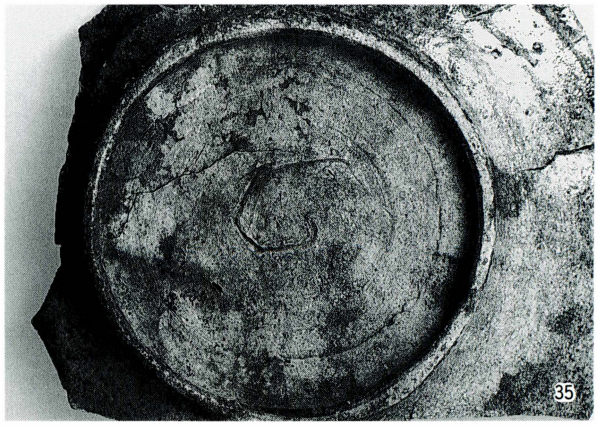
13・48：ヘラケズリナデ調整　9・24・61：ヘラ削り無調整

16・30・32：糸切り無調整

図版 6　高台と底部外面調整(2)







37・58・59・61：糸切り無調整　　31：糸切り痕、草茎痕
34：糸切り痕、籾殻痕　22：籾殻痕　35：線刻

報　告　書　抄　録

ふ り が な	ときぐちにしやまこようあと
書　　名	**土 岐 口 西 山 古 窯 跡**
副　書　名	土岐プラズマ・リサーチパーク第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	岐阜県文化財保護センター　調査報告書
シリーズ番号	第50集
編 著 者 名	長谷川幸志
編 集 機 関	財団法人岐阜県文化財保護センター
所　在　地	〒502-0003　岐阜市三田洞東1-26-1　Tel058(237)8550
発 行 年 月 日	西暦1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　名	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
土岐口西山古窯跡（ときぐちにしやまこようあと）	岐阜県土岐市土岐津町土岐口字西山（ぎふけんときしときつちょうときぐちあざにしやま）	21212	05314	35° 20′ 15″	135° 10′ 17″	19980615 ～ 19980804	500m²	土岐プラズマ・リサーチパーク第一土地区画整理事業に伴う

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特　記　事　項
土岐口西山古窯跡	古窯跡	古代	灰原 ピット？	白瓷(10世紀後半)	緑地帯として保存される部分に古窯跡が所在していることを確認した。

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第50集

土岐口西山古窯跡

土岐プラズマ・リサーチパーク第一土地区画
整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1999年３月31日

編集・発行　財団法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東１―26―１
印　　刷　西濃印刷株式会社